

【背景及び目的】

小学校6年から中学校1年で不登校児童生徒数が約3倍に急増する「中1ギャップ」は本県の大きな課題であり、その解消に向けた小中連携の推進が求められております。

EASY小学校版は中学校入学前の児童を対象に中学校生活への期待や不安等を測る調査です。小中連携の取組を実施する際の視点の明確化や、支援の必要な児童の情報を中学校に引き継ぐ資料として活用いただき、切れ目のない生徒指導体制の構築が進むようお願いいたします。

1 実施方法

- (1) 小学校6年生を対象に実施してください。
- (2) 実施時間は、約20分程度ですので、学級活動等の時間を御活用ください。
- (3) 「質問内容をよく読み、素直に答える」よう指示してください。
- (4) 分かりにくい言葉は簡単に言い換えるなど、説明を入れていただいても結構です。

2 実施後の活用

- (1) 調査結果を「学校集計表」の①「データ入力シート」に入力してください。
- (2) 中学校生活への期待と不安の傾向と、配慮の必要等が②「観点別集計」へ集計されます。

【以下活用例】

- (3) ③「学校総合票」の結果をもとに小中連携の取組を実施する。

○ 「学校生活に関する不安」に対する取組例

【学校説明会の中に、中学1年生（1つ上の先輩）の代表者による説明の場面を設定】

- ・ 実体験にもとづいた説明により不安解消の効果が期待できる。

○ 「学習に関する不安」に対する取組例

【小学6年生の児童が中学校に出向き、中学1年生の授業参観を実施】

- ・ 不安に思っていることを中学校教員に質問する場を設けるなど、学習に対する不安を軽減する

○ 「先生に関する不安」に対する取組例

【英語や理科などで、中学校教員による出前授業を実施】

- ・ 専門性の高い授業を体験させることで、教科担任制の利点を知り、学習意欲の向上につなげる

○ 「先輩や部活動に関する不安」に対する取組例

【学校説明会時に、AFPY等を活用した中学生との交流タイムや部活動体験などを設定】

- (4) ④「学校一覧表」に引き継ぎ事項を加え、「小中情報交換会資料」の一つとする。

○ 学校の実情に応じて、欠席状況等の指導上参考となる諸事項を加え、引き継ぎ資料とする。

○ 特に配慮を要する児童については、個別支援連絡票も併用。（不登校対策に係るQ&A集P37参照）

- (5) ④「学校一覧表」に助言等を書き込み、⑤「個人票」を作成、個別教育相談等を実施。

○ 中学校生活への期待を積極的に話題にし、希望をもって中学校に進学できるよう配慮する。

○ 一人ひとりの抱えている不安感等を具体的に傾聴し、ありのままに受けとめるよう心がける。

○ 小学校で頑張ったことや本人のよさを伝え、自信をもって中学校に進学できるよう配慮する。

3 過去の調査結果について（H20～21年実施分、児童数14,738人）

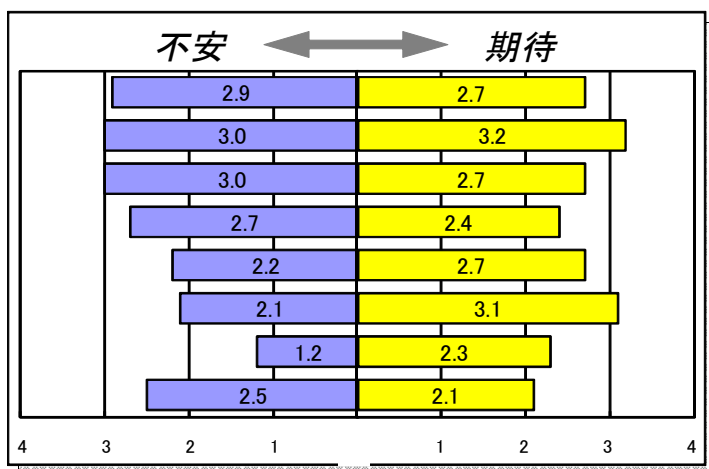
【1. 中学校や中学生になった自分を想像して答えましょう】

- 32の質問に各2点満点で回答、8項目について期待と不安の傾向を各4点満点で集計

図：山口県の平均値

中学校における

- A. 学校生活に関すること
- B. 規則に関すること
- C. 学習に関すること
- D. 先生に関すること
- E. 友達や先輩に関すること
- F. 部活動に関すること
- G. 自分自身に関すること
- H. 家庭生活に関すること



- 中学校に関する情報量が多いほど不安が少ない

「兄弟あり群」と「兄弟なし群」で回答を比較すると、「兄弟あり群」の方が全体的に不安が低い。このことは、中学校に関する情報量と関連していると考えられ、中学校入学以前に情報をしっかり伝えることが重要であることを示している。

- 女子の方が不安傾向が高い

性別で回答を比較すると、男子に比べ女子の方が不安傾向が高い。これは、一般的に女子の方が強い仲間意識をもっていることから現れる特徴と考えられる。中でも、「E. 友達や先輩に関すること」では、男子に比べ女子の方が不安傾向が高い。

【2. 現在の自分をふりかえって答えましょう】

- 18の質問に各2点満点で回答、対人関係等の適応状態を3項目に分類して集計

分類内容	平均／満点	配慮の必要な児童(▲)の出現率等
P. 対人関係の不安	2.6／10	1.2% (8点以上を▲と表示)
Q. 不器用さやこだわり	4.3／10	7.2% (8点以上を▲と表示)
R. 社会的受容	10.2／16	6.4% (5点以下を▲と表示)

- 「R. 社会的受容」については、男子に配慮の必要な児童が多い

性別で回答を比較すると、回答の平均値には男女の有意差は見られないが、配慮の必要な児童の出現率は女子4.5%に対し、男子8.5%と大きなひらきがある。

- 回答の傾向に併せ、学級活動や学年行事を組むと効果的

配慮の必要な児童だけでなく、学級や学年の傾向を把握、それに応じてAFPYやグループエンカウンターなどの手法を用いた対人スキルトレーニングを実施するとよい。